

甲状腺外科草子 14

「鬼貫」の一番長い日（承前）

杉野 圭三

御前懇談会（昭和 20 年 6 月 22 日）

この懇談会で終戦への大きな方針転換が決定された。昭和天皇は総理、外相、陸海相、統帥部両総長の 6 人の前で『戦争の終結に就きても此の際従来の観念に囚われることなく、速に具体的研究を遂げ、之が実現に努力せむことを望む、首相の意見如何に』と発言され、首相は『仰せの通りにて其実現を凶らざるべからず』と奉答した。首相と昭和天皇の阿吽の呼吸による連携プレーであろうか。

黙殺かノーコメントか？

ポツダム宣言に対する内閣の「黙殺」発言が大きな問題となったが、誰がどのような経緯で発言し、紙面で取り扱われるようになったのか不明瞭な点が多く、ここでは「ノーコメント」とする、恐らくこの様な曖昧な推測などが原因かもしれない。

突然の御前会議（8 月 9 日）

最高戦争指導会議構成員会議が 8 月 9 日午前 11 時から始まり 3 対 3 で意見が分かれ結論が出ず、臨時閣議が午後 2 時半から午後 10 時過ぎまで開かれ、一旦休憩に入った。首相は直ちに皇居に参内し、午後 10 時 50 分、御前会議を奏請した。奏請状には軍令部総長の署名・花押が必要であったが、迫水書記官長は予め期日未記入で手に入れていた（緊急時に必要であり、事前に必ず連絡すると約束していたものであり、陸軍幹部は騙されたと怒った！）。同日午後 11 時 50 分ごろ、御前会議が開催された。この場での意見も割れ 3 対 3 となり、10 日午前 2 時ごろ総理が立ち上がり、静かにまっすぐに玉座の前に進み最敬礼をされた。『長時間の会議でも結論が得られず、事柄は極めて重大で一刻の猶予も許されず、陛下の

思し召しを伺い会議の決定としたい思う』。陛下は『私の意見は外務大臣の申ししていることに同意である。これ以上戦争を継続しても我が国の立場が有利になる保証はなく、ただ死と悲惨とが増大するばかりだ』、かくして聖断は下された。（首相行動開始から約 23 時間後）

御前会議再び（8 月 14 日）

内閣の方針は決定されたものの、連合国返答の「subject to」に関する解釈や「国体護持」に関する意見が起こり、大混乱が生じた。

首相は 8 月 14 日朝、参内し内閣からの正式手続きでは間に合わないので天皇からの招集の形での依頼を行った。会議は午前 10 時 50 分開始、天皇が自分の考えを述べられた。

「私は世界の現状と国内の事情とを充分検討した結果、これ以上戦争を継続することは無理だと考える。自分は如何になろうとも万民の生命を助けたい。此の際耐へがたきを耐へ、忍び難きを忍び一致協力、将来の回復に立ち直りたいと思ふ。（抜粋）」



8 月 14 日の御前会議（白川一郎画）

御前会議の後、陸軍省に戻った陸相は 20 名以上の若手将校に囲まれ、「治安維持のための兵力使用权」行使や辞職を迫られた。陸相にはクーデター計画を抑える責任があった。

『聖断は下った。今はそれに従うばかりである。不服の者は自分の屍を超えてゆけ！』

その時突然一人の将校が慟哭し、陸相と将校たちは一言も語らずにらみあっていた。



映画「日本のいちばん長い日」（1967）

阿南陸相の葉巻

同 14 日夜、阿南大臣は官邸に鈴木貫太郎総理を訪ねた。その時の様子を、迫水久常氏が次のように語っている。

14 日夜 12 時ごろ、私は総理大臣室におりました。そこに阿南陸相は軍帽を持ち刀を吊って入ってこられ、総理に対してきわめて丁寧に礼をされた後、『この数日来、私が申し上げましたことは、総理大臣閣下に対し非常な御迷惑をおかけいたしましたと存じますが、私の本旨としますところは、ただ皇室の御安泰を祈ること以外に何もありません。あえて他意あるものではございません。どうぞ御了解をお願いします』

総理は席を立ち、机を廻って、陸相のそばに寄られ、その肩に手をかけて、『陸軍大臣、あなたの心持は私が一番よく知っているつもりです。阿南さん皇室は必ず御安泰ですよ、何となれば、陛下は春秋における御先祖のおまつりを、必ず御自分で熱心になさる方でございますから』と言われました。阿南大臣はそれをお聞きになりますと両方のほおにすつと涙が流れまして、『私も固くそう信じています』と云って礼をされた。そして、小脇にしていた新聞紙包みの葉巻を差し出し、『これは南方第一線からの届け物であります。私は嗜みませんので、総理に吸っていただきたく持参しました』と言って首相の机の端に置き、静かに部屋を出て行かれた。私は玄関までお見送りし、総理大臣室に帰って参りますと、鈴木総理は暗然とした面持で、『阿南陸軍大臣は暇乞に来たんだよ』と申されたのであります。私はその時の阿南陸相のお姿を今、目の前に彷彿として思い浮かべることができるのでございます。

首相はこの形見の葉巻を吸う気になれず、数か月後の阿南陸相の命日に供養として全て焼いたとのことである。



阿南陸相の葉巻の場面（同映画）

阿南陸相遺書（一死大罪を謝す）

最後の閣議（8月15日）

陸相自刃を聞き、首相が述べた哀悼の辞。『阿南陸相は忠実に政府の策に従われた。陸軍大臣が辞表を提出されたならば、わが内閣は即座に瓦解したであろう。阿南大將が辞職されなかったのも、われわれはその主目標、つまり戦争終結の目的を達成することができた。私はそのことを陸相に深く感謝しなくてはならない。阿南大將はまことに誠実な人で世にも珍しい軍人だった。実に立派な大臣であった。わたしは、その死が痛恨に堪えない』

「玉音盤」をめぐる騒動やその他の出来事は「日本のいちばん長い日」に詳細が記され、映画（岡本喜八監督、1967）も傑作である。笠智衆（鈴木首相）、三船敏郎（阿南陸相）も好演であったが、畑中少佐を演じた黒沢年男の熱演が光っていた。



映画「日本のいちばん長い日」（1967）

鈴木貫太郎内閣は僅か 4 か月の短期政権だったが、阿南陸相をはじめ閣僚たちが命を削り、「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び、万世の太平を開こう」とした救国の内閣であった。

参考文献

1. 半藤一利、日本の一番長い日（決定版）、文春文庫、2006.
2. 立石優、鈴木貫太郎。PHP 文庫、2000.
3. 小堀桂一郎、宰相 鈴木貫太郎。文春文庫、1987.

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022年1月12日